

# 安達清風の学術交流と開拓事業

— 泊園塾・昌平黌出身者の実践的軌跡 —

横 山 俊一郎

## Adachi Seihu's Academic Exchange and His Reclamation Project:

the Achievements of a Graduate of Hakuen-juku and Shoheiko

YOKOYAMA Shunichiro

This paper examines the mutual relationship between the academic connections and the political practice of Adachi Seifu, a graduate of Hakuen-juku in Osaka and Shoheiko in Edo, as an example of the depth of Confucian learning that samurai engaged in practical affairs had acquired by the late Tokugawa period.

Examples of Adachi's scholarly contacts are two men he befriended during the course of his education toward the end of the Tokugawa period: the Confucian scholar Mori Kiemon and the village headman Okubo Shichirozaemon. Adachi's political practice was embodied in a land reclamation project he conducted in the Shoboku district of Okayama prefecture after the Meiji Restoration of 1868.

This examination reveals that Seifu saw the rise of an educated populace as desirable, and practical education in the classroom as crucial to achieving this end. The paper concludes with an examination of the scholarly connections and political ideas of Yamada Kodo, a graduate of the Kaitokudo in Osaka, and demonstrates that Adachi Seifu was engaged in a practical implementation of Kodo's political vision.

## はじめに

筆者はこれまで日本の儒者の政治実践に注目してきたが、彼らを考察するに当たっては〈思想家〉と〈実務家〉という二分法が有効であった<sup>1)</sup>。なぜなら、後者の〈実務家〉としての儒者は確かに当時の藩社会で一定の存在感を持っていたからである。しかし、幕末期にもなると、元々実務に携わる武士でありながら豊かな儒教教養を持つ人々が現われてくる。これは筆者の研究枠組である〈実務家〉としての儒者の解体を意味するといえよう。

本稿では、上記の問題関心から〈実務家〉としての儒者研究のいわば終着点に立つ人物として因幡国鳥取藩士安達清風〔天保六（1835）年—明治十七（1884）年〕を取り上げたい。清風は実務に携わる武士身分でありながら幕末期の泊園塾に入塾し、次いで江戸および水戸に遊学、維新时期には岡山県の養蚕業の発展に貢献した人物である。

清風の政治実践の先行研究としては、磯田道史「幕末維新时期の藩校教育と人材登用—鳥取藩を事例として—」（『史学』第71巻2，3号、三田史学会、2002年）が挙げられる。そこでは、水戸遊学時に清風が藩主に上書した安政三（1856）年の藩政改革の議（「七議」）が考察され、「言路洞開」や「人才挙用」と同義の言説が引用されていることを踏まえて「藤田東湖の著作『常陸帯』の影響を強くうけている」と結論づけている。

本稿では、清風の教育的背景の全体像に接近するため、そうした水戸遊学時の経験に限らず、大坂の泊園塾と江戸の昌平黉の在籍時の経験にまで考察対象を拡げることとする。一方、清風の政治実践については、幕末から明治に至る連続面を探るため、幕末期の献策活動等は概観する程度にとどめ、維新时期の教育および産業振興を中心に考察することとする。

まず初めに、清風が没して二十五年が経った明治四十二（1909）年、当時の岡山県知事であった谷口留五郎が清風生前の功勞に対して金牌とともに贈った賞状を見てみよう。

### 功勞賞授与証

勝田郡北吉野村

故 安達清風

本県蚕業創始の時に於て夙に斯業の有利なるを確認し率先して政府に稟請して数万円の資を得、刻苦経営勝田郡に於ける不毛の原野をして数百町歩の耕地たらしめ、茲に桑樹を

1) 〈思想家〉もしくは〈実務家〉として儒者を分類する意義については、拙稿「江戸時代後期における〈実務家〉としての儒者—瀬戸内諸藩における懷徳堂學術の受容を中心として—」（『思想史研究』第17号、日本思想史・思想論研究会、2013年）参照。

栽培し以て養蚕の業を奨励し、地方農家の迷夢を打破し、今日該郡地方をして県下有数の蚕業地たらしむるに至る、その功勞洵に顕著なりとす、仍て茲に之を追賞す。

明治四十二年十月六日

岡山県知事正五位勲四等谷口留五郎 印<sup>2)</sup>

このように、清風は岡山県の勝田郡地方の原野を開拓し、そこに桑樹を栽培することによって県下有数の蚕業地とする功績があった。では、清風はどのようにしてこれらの事業を推進し、どのような教育的背景によってその実行力や構想力を培ったのであろうか。

その問いに答えるため、本稿では、まず、幕末期の清風の略歴を概観した後、遊学先の交友に宛てた文章を通して清風の学術交流の実態を明らかにし、次に、開拓地での清風の活動履歴を概観した後、開拓地で推進した学校運営を通して清風の開拓地での構想と実践を提示する。最終的に、幕末期の清風の学術交流が維新期の清風の教育および産業振興とどのように関わることについて論じてみたい。

本稿では、考察するに当たって、主な資料として『宅廣遺稿』と『勝農史』を用いた。

前者は鳥取県立図書館に所蔵された『諸家文集』所収のものであり、「京都市 安達秀文原書アリ」との付記により、当時京都にいた清風の長男秀文から借りて書き写したものとわかる<sup>3)</sup>。そのタイトルは、1「上閣老某侯書」、2「送森子順序」、3「褒状序」、4「文天祥指南録序」、5「送大久保七郎左衛門序」、6「湯本武彦墓表」、7「原仲寧遺跋」、8「岸本宗吉墓表」、9「榎本新吾碑銘」、10「摘翠軒記」、11「東山雅集記」という順に並んでいる。このうち本稿では、清風の教育的背景の全体像に接近するため、清風が遊学先の交友に宛てた2と5を取り上げたい。

後者は岡山県立勝間田農林高等学校（現岡山県立勝間田高等学校）が創立八十周年を記念して刊行した学校史である。勝間田農林高等学校の源流は、清風が勝田郡地方を開拓する前年（明治十二（1879）年四月十三日）に開校した私塾「有功学舎」である。そのため、清風が有功学舎を運営する様子を伝える幾つかの資料が収められている。

2) 木村泰二編『勝農史』創立八十周年記念（岡山県立勝間田農林高等学校、1981年）14、15頁。

3) 『諸家文集』は鳥取藩の儒学・国学者の文集であり、時期不明かつ作者不明の写本である。そのタイトルは、A 宮原海宇先生遺稿（宮原積著）、B 宅廣遺稿（安達清風著）、C 文稿（熊谷道伸著）、D 賞賜論（熊谷原著）、E 留皮録、F 真塾俊書、G 孝子傳畧（伊藤宜堂著）、H 丹後行稿（近藤羽儀著）、I 備行みちの記という順に並んでいる。安達秀文については、安達満郎『因州安達家』（非売品、1984年）63頁の安達家の系図参照。

このうち本稿では、幕末から明治にかけての清風の政治実践の連続面を探るため、維新期の清風による教育および産業振興の実態がわかる、清風が有功学舎を設立するために戸長を説得した「有親会社設立に関する説論文」（同年一月十三日作成）と、清風が有功学舎を中学校へと発展させるために戸長を説得した「中学校ヲ設立シ物産ヲ興隆スルニ就キ同志申合セ假約定書」（同年九月二十五日作成）を取り上げたい。

## 一、幕末の略歴

まず、幕末期における清風の略歴を概観しておこう<sup>4)</sup>。

清風は天保六（1835）年、因幡国鳥取藩士安達辰三郎の長男として生まれた。名は清一郎。字は子孝。号は宅広。同十二（1841）年堀静軒の門に入る。弘化四（1847）年父辰三郎が大坂目付に就任、従って大坂に赴き、泊園塾の藤澤東咳に師事した。嘉永四（1851）年、京都の岩垣月洲の塾に入り、しばらくして再び大坂の泊園塾に戻ったという。同五（1852）年正月、摂津平野の含翠堂に約半年留まったのち帰国する。

嘉永五（1852）年、父辰三郎の江戸詰に随行し、河田迪斎の門に入った。安政元（1854）年正月、藩命を受けて八王子台場（現鎌倉市）を守る。同年四月昌平黌書生寮に入った（舎長に重野安繹、寮友に岡鹿門<sup>5)</sup>）。在寮中、羽倉簡堂・藤森弘庵・藤田東湖に学んだという。

安政二（1855）年四月水戸に赴き、神発流砲術で有名な福地政次郎の門に入り、傍ら会澤正志斎に学ぶ<sup>6)</sup>。同年七月藩主慶徳に上書し、両国寺院の梵鐘を没収して武備に供する策を論じた。同三（1856）年藩主慶徳に上書するが、それは藩政改革の議（人才抜擢・軍制改革・国富増進等「七議」）であった。同四（1857）年四月、蝦夷地探索の志により藩主慶徳の父徳川斉昭に内

4) 安達清風の略歴については、金田進編『鳥取県百傑伝』（山陰評論社、1970年）や梶川栄吉『贈正五位安達清風』（非売品、発行年不明）もあるが、鳥取県編『鳥取藩史』第1巻（鳥取県立鳥取図書館、1969年）224～236頁が最も詳しい。また、吾妻重二編『泊園書院歴史資料集—泊園書院資料集成1』（関西大学東西学術研究所、2010年）に収録された『菁莪録』には、安達清風の略伝が収められている。なお、安達家の系図と祖先の履歴については、前掲、安達満郎『因州安達家』63～74頁参照。

5) 鳥取西高資料掛編『鳥城』第18号（鳥取県立鳥取西高等学校、1985年）所収の「鹿門岡千仞撰」（62～67頁）によると、「甲申歳以事來東京會余游漢土大悦日子游足為吾黨吐氣與重野藤野諸友設祖筵於滬上為一時盛事」とあり、清風没年の明治十七（1884）年、岡鹿門が上京した清風を中国遊学に誘い、さらに重野安繹を交えて隅田川のほとりで送別の宴会を開いたという。後述するように、清風は当時、開拓資金の調達のため上京していたのである。ちなみに、岡鹿門は文久期に鳥取に在る清風に京都政局を伝えるなど、幕末期の清風の政治活動を支援した経歴がある。岡鹿門は東咳の友人でもあり、その略歴は、前掲、吾妻重二編『泊園書院歴史資料集—泊園書院資料集成1』の「泊園人物列伝」（369頁）に収録されている。

6) ちなみに、水戸遊学時の清風の交友、大久保七郎左衛門も福地政次郎のもとで神発流砲術を学んでいる（後述）。

願し、慶徳の聴許を得ようとするが失敗したらしい。

安政四（1857）年六月、京都の梅田雲浜・頼三樹三郎らを訪ね、天下の大計を論じた。同年九月、神発流砲術の採用を藩に申請、認められて家中に伝授する。同五（1858）年十月頃、堀庄次郎・佐善修蔵・正垣薫らと会し、常に国事を談じたという。萬延元（1860）年、桜田門外の変に関わった水戸藩士関鉄之介が清風を頼りにきたが資を給して逃れさせた。

文久二（1862）年七月堀庄次郎・正垣薫らが藩主慶徳に入京するよう要請する。同年十月、清風、堀庄次郎の推薦により京都留守居職を拝命して奔走した<sup>7)</sup>。同年十二月朝廷、各藩を学習院に招き、京師内外や淀川近辺の防禦等の策略を言上すべき旨を達したが、清風これに列したという。同三（1862）年六月、長州藩の攘夷を応援するため、援兵を派遣するよう建言する。同年十一月、昇進して寄合上席となった。元治元（1864）年天狗党の乱後の水戸藩のために周旋することを命じられたという。

慶應元（1865）年閏五月、清風が会主となって水戸・備前・浜田・島原および鳥取藩の親藩会を開催する。また、当時一橋慶喜に仕えていた水戸藩士原市之進（仲寧）らと昌平黌旧友会も開催した<sup>8)</sup>。その頃、長州再征につき老中阿部正外から意見を求められたらしい<sup>9)</sup>。同年八月、幕府、長州藩兵の侵入に備えて但馬地方を鳥取藩に預ける意を示し、清風これを好機として、当地の米銀によって農兵を組織する計画を家老に建議する。

慶應元（1865）年十月御役御免となり、寄合組となる。同三（1867）年十二月上書して人才起用と言路洞開を論じた。再度上書し、鳥取藩が水戸藩と協力して薩長の専制を押さえると政事は公正に帰することを論じたという。

## 二、学術交流の実態

次に、遊学先の交友に宛てた文章を通して清風の学術交流の実態を明らかにしたい。ここでは、『宅廣遺稿』所収の「送森子順序」と「送大久保七郎左衛門序」を考察することとする。前

7) 清風の登用を藩主慶徳に建白した堀庄次郎は、同じく鳥取藩儒である正垣薫とともに藩校教育を人材登用に反映させようとする改革派に位置していた（磯田道史「幕末維新期の藩校教育と人材登用—鳥取藩を事例として—」『史学』第71巻2、3号、三田史学会、2002年）。

8) 清風は没年の明治十七（1884）年、原市之進（仲寧）の遺稿集『尚不愧齋存稿』（綿引天行、1884年）に跋文を寄せている。これは『宅廣遺稿』所収「原仲寧遺跋」と同一のものである。

9) 『宅廣遺稿』所収「上閣老某侯書」は、その内容からして当時のものと推測される。そこには「且向者有糾問長藩如其不服而征討之命其事未終而近日有外夷迫于長州之説果然則皇国之大事莫過焉当速下令于其四隣侯伯援之不使皇国之地為醜夷之所汚是尤今日之急務也」とあり、未だ解決していない長州征討について、近日中に外夷が長州に迫るという風説を引いて一国の大事が過ぎ去っていない現状を訴え、速やかに周囲の諸大名に命じて長州を援助することが急務であることを説いている。

者からは大坂および江戸遊学時の交流状況、後者からは水戸遊学時の交流状況を窺うことができるからである。

### (1) 大坂・江戸遊学

まず、『宅廣遺稿』所収「送森子順序」(一部)であるが、これは江戸遊学を終えた森子順という人物を清風が寛永寺付近で送別した際に贈った言葉である。森喜右衛門(子順)〔文政一二(1829)年—慶應元(1865)年〕は、近江国膳所藩儒森鼎の次男である<sup>10)</sup>。名は祐信。大坂では藤澤東暎と篠崎小竹に漢学を学び、砲術を坂本源之助に学んだ。江戸では昌平黌に入門、傍ら兵法を講習すること五年にして帰国する。

のちに抜擢されて藩校遵義堂の教頭となり、兼ねて軍法を教えた。また、京都に行き長州藩士と交わった。慶應元(1865)年膳所城事件に連座して斬られる。平素から藤田東湖を慕って尊攘家を自任し、時事を論じるに当たり直言して憚らなかったという。

①初余之在撰也。与膳所人森子順同学。于泊園塾。子順長余六歳。其学之博識之卓。文之雄邁俊偉。与詩之秀麗雅健。非余所能企及也。而其為人磊落奇偉好讀史。常拍案歎曰。②天下草沢之中。豈無英雄乎。所見唯有淡海偉人耳。淡海偉人盖具號也。又見余治経罵曰。③方今四夷強梁。国歩將艱難。子欲為郷里之善人歟。則可矣。苟欲為天下有用之人歟。則何区々治経之為。而其詩文則多憂愁怨憤之氣。④余謂方今王沢旁流海岳尊父。子順抑有所奮激。而然乎。何其悽愴憤惋無和平之氣象歟。以為狂生也。既而子順去游于江戸。余亦流寓于攝之鄙。不相見者数年。⑤聞見漸廣粗知天下之形勢。而辺警方起。朝野騷擾。心之所遇。目之所觸。于詩于文。不自覺其悽愴怨。然後。知子順前日之憂愁憤怨。真有所見。而非狂言也。願一交臂。共談天下之事。而不可得矣。壬子秋余遊江戸。聞子順抱病而歸。既而余亦省親而歸。而子順再游。如巧相避者矣。⑥甲寅春余亦再游。入茗溪黌學舎。子順先在焉。業既就行既修。不復為激論放言。余益服其為人也。再後。切劘于経史。徵逐于文酒者。二年。所今春期滿而歸。嗚呼。⑦余於子順。相知最旧相交最篤。而受益亦不少矣<sup>11)</sup>。

まず、清風の子順との出会いは大坂の泊園塾に在籍している時であった(下線①)。さらに子

10) 森喜右衛門の略歴については、安岡昭男編『幕末維新大人名事典』下巻(新人物往来社、2010年)573頁。また、前掲、吾妻重二編『泊園書院歴史資料集—泊園書院資料集成1』に収録された『菁莪録』の森喜右衛門の略伝を参照した。それによると、喜右衛門が泊園塾に入門したのは嘉永三(1850)年である。

11) 『宅廣遺稿』所収「送森子順序」。筆者の判断により句点を附した。

順は「草沢」すなわち民間人の中に「英雄」がないことを嘆いている（下線②）。また、清風が経学を治めるのを見て、「郷里之善人」ならば結構だが「天下有用之人」になりたければ、取るに足りない経学を治めていては、自らの詩文に「憂愁怨憤之氣」が湧いてこないという（下線③）。それに対して清風は、「王沢」すなわち天子の恵みはただ傍らに流れていてより大きな恵みは「尊父」すなわち自らの父親から享受している事実を挙げ、これに激しく怒る子順を「狂生」と見なしている（下線④）。

やがて二人は再会することなく数年が過ぎたが、「辺警」すなわち辺境の警備が問題となって「朝野」が騒擾することによって、清風は図らずも「悽愴憤怨」が詩や文に反映されるようになり、子順の主張が「狂言」ではないことを自覚したという（下線⑤）。

清風はさらに嘉永七（1854）年の春に江戸の昌平黌に入門し、すでに在籍していた子順に再会することとなった（下線⑥）。こうして二人は「経史」を高め合う仲となったのである。清風にとって子順は最も旧くから知っており、最も篤く交わる関係であった。その付き合いによる「受益」は少なからずあったという（下線⑦）。

以上のように、清風は泊園塾および昌平黌の親友であった森子順との交流から刺激を得ている。子順は「草沢」の「英雄」を待望するとともに、経学を治めるだけでは「郷里之善人」になりえても「天下有用之人」になりえないと認識している。一方、清風は泊園塾にいた当初、そうした子順を「狂生」とみなしていたが、「辺警」による「朝野」の騒擾を目の当たりにすることによって、それが「狂言」ではないと自覚することに繋がった。

## （2）水戸遊学

次に、『宅廣遺稿』所収「送大久保七郎左衛門序」（全文）を見てみよう。これは自らの意見が支配者に採用されず、ついに直接行動を起こそうとする大久保七郎左衛門という人物を清風がその身を案じて贈った言葉である。大久保七郎左衛門〔享和元（1801）年—元治元（1864）年〕は、壬生藩領下総国結城郡菅谷村の名主である。色川三中に国学を学び、次いで水戸へ行き、福地政次郎に砲術を学んだという。元治元（1864）年、天狗党の筑波山拳兵に応じたが、のちに横浜襲撃による攘夷実行を図る。幕軍の追撃により敗走し自決した。

初余十二三。讀宋陳同甫奉高宗書。慨然嘆曰。①方今黠胡犯順。廣議蹈宋轍。而未聞有赤心憂国如同甫者也。已而十四。入于摺。游于京師。流落殆十年。交于天下之士多。②未見以一布衣之賤直言讜論如同甫者也。乙卯之春。游水戸。未幾有。來通名刺者曰。下野州之屬士。大久保七郎左衛門。余一見知其奇人也。既而談及時事。口角方出沫。忼慨淋漓。殆

欲食賊臣之肉飲醜虜之血。且囑曰。我祖曾仕新田公尽力於王事。及中世以後降成農。猶未離故土也。③我嘆以神明之國汗胡塵。上書論時事者再三。有司以為狂愚以為迂濶。卻不用去講究攘夷之術者二年。今方欲探沿海之要樞。訪四方之豪傑。為一大議論。以覺宇宙間之一大夢。④子盍一言。余壯其言偉其志。窃以為當今之陳同甫也。嗚呼。方同甫之上書。使高宗有少所覺悟。⑤豈至于聞迂濶生大學之講于舟中哉。五七年前後。使用事之臣有少察。於七郎左衛門之言。今日之天下不如斯紛紜也。嗚呼已哉。同甫所謂除授。必資格才者。以跡弛捨不才者。以平穩用正言。以迂濶廢巽言。以歎美容者。豈獨宋而已哉。嗚呼已哉。七郎左衛門行矣。勿泊下田之港。醜虜為市。勿登芳野之山。延元陵荒樵牧登矣<sup>12)</sup>。

まず、清風はかつて宋の陳同甫の上書を読んだ感想として、西洋列強の脅威に晒された現在、「宋の轍を踏む」こと、すなわち主戦ではなく和議を広く議論しているが、陳同甫のように「赤心」すなわち、真心を込めて国を憂える者がいることを聞かないという（下線①）。

陳同甫〔1143-1194〕は、名は亮、南宋の思想家である<sup>13)</sup>。永康（浙江省）の人。金との和睦に不満を持ち、「中興論」を上奏して北宋以来の領土回復を主張したが、採用されず、郷里に帰って学問と著述に専念した。同甫にとって聖人の学は国家の政治・経済・軍事の危機を救い、民衆の生活の安定を図るものとして意識されていた。朱熹より十三歳の年少で、交友関係はあったが、その個人の修養に重点を置く傾向には反発し、同調することはなかった。

次に、清風は大坂や京都に遊学し、殆んど十年間天下の学者と交流したが、陳同甫のように一「布衣」すなわち一平民の「直言」によって「讜論」すなわち正論をいう者を見たことがなかったという（下線②）。

しかし、水戸遊学時に出会った大久保七郎左衛門は、西洋列強の領土的野心に備えて、再三「上書」して「時事」を論じたが、「有司」すなわち官吏はそれを「狂愚」かつ「迂濶」としたため、採用されずに二年が過ぎてしまったという。そこで、「沿海之要樞」を探索して「四方之豪傑」を訪問し、一大「議論」を喚起することを計画しているという（下線③）。

七郎左衛門が喋り終わると、清風はその言葉や意志に高揚し、七郎左衛門こそ「當今之陳同甫」だと考えるようになった（下線④）。清風にとって陳同甫の「上書」は、皇帝を少なからず「覚悟」させるところがあり、「迂濶」な読書人による舟中の「大学之講」とは全く異なるのである（下線⑤）。

12) 『宅廣遺稿』所収「送大久保七郎左衛門序」。筆者の判断により句点を附した。

13) 日原利国編『中国思想辞典』（研文出版、1984年）312頁。



以上のように、清風は水戸遊学時に出会った大久保七郎左衛門の一言に感銘を受け、七郎左衛門こそ「当今之陳同甫」だと考えるようになった。清風にとって「陳同甫」とは、一「布衣」でありながら「直言」によって「讜論」する者と認識されている。また、その「上書」は「迂闊」な読書人による「大学之講」と全く異なるともいう。

### 三、維新の開拓者として

前章では、清風の学術交流の実態につき検討したが、本章では、明治初期における清風の活動、とりわけ開拓地での活動がどのようなものであったのかをたどってみよう<sup>14)</sup>。

明治十一年(1878)年九月、清風は当時の岡山県知事高崎五六に頼んで勝北郡長に就任し〔明治三十三(1900)年に勝北郡と勝南郡が合併して勝田郡となる〕、勝加茂西上村(現津山市)に居を構え、民家を借りて郡役所を設け、さらに警察署を置いた。

明治十二(1879)年一月十三日、戸長集会を開き、有功学舎創立の必要性を説いた。その際、蓄積会社としての有親会社を設立して資金の調達を図った(「有親会社設立に関する説論文」)。同年四月十三日、朝吉神社の舞台を使って有功学舎を開校する。「四書」「小学」の句読や『皇朝史略』の講義等、漢学を中心に教授する。同年の秋口、師範学校の受験準備のため、のちに社会主義運動の先駆者となる片山潜在有功学舎に入学する<sup>15)</sup>。片山は初めて輪講することを学び、漢学に興味を持ち始め、殊に『十八史略』を研究したという。

明治十二(1879)年九月二十五日、有功学舎を中学校へと発展させ、さらに物産を興隆させるための約束手書を作成し、戸長にその調印を求める(「中学校ヲ設立シ物産ヲ興隆スルニ就キ同志申合せ假約定書」)。同年中、県の補助を受けて津山以東の因幡街道を拡張修理する他、開墾用の洋式農具の貸与を内務省勸農局に申請している。

明治十三(1880)年一月、郡役所を移して日本原(現勝田郡奈義町)の開墾に着手し、鳥取・岡山・浜田等の旧藩士族四十余戸を入植させた。徳風社という団体を結成して開拓作業が行な

14) 清風の勝北郡長時代の事蹟については、岡山縣勝田郡役所編『岡山縣勝田郡誌』(岡山縣勝田郡役所、1912年)、北吉野村史編集委員編『北吉野村史』(北吉野村史編纂会、1956年)、原奎一郎編『原敬日記』第1巻(福村出版、1965年)、片山潜『わが回想』上巻(徳間書店、1967年)、中尾泰二編『広戸村誌』(広戸村誌発刊委員会、1977年)、岡山県畜産史編纂委員会編『岡山県畜産史』(岡山県畜産史編纂委員会、1980年)、奈義町誌編纂委員会編『奈義町誌』(奈義町、1980年)、木村泰二編『勝農史』創立八十周年記念(岡山県立勝間田農林高等学校、1981年)、勝央町誌発刊委員会編『勝央町誌』(勝央町、1984年)、勝北町誌編纂委員会編『勝北町誌』(勝北町、1991年)、奈義町誌編纂委員会編『奈義町誌(続編)』(奈義町、1994年)参照。

15) ちなみに、片山潜はのちに上京し、明治十四(1881)年頃学費が安いことを理由として岡鹿門の漢学塾に入塾している(前掲、片山潜『わが回想』上巻、138、139頁)。

われる。同年四月、郡内に布告して毎戸の養蚕を奨励し、上野国から養蚕工を招聘して養蚕伝習所を設置する。

明治十三（1880）年七月、上京して農商務大輔品川弥二郎に談判し、政府から開拓資金二万五千円を借り入れる。この資金によって土地を買い上げ、さらに県から洋式農機具を借り受けて数百町歩の田畑を開墾する。水田には新しい粃種を播き、畑地には桑の苗木を植えた。また、製紙工を招聘して改良製紙の方法を伝授し、大平紙を創製した。桑や楮の他、茶や薪炭木としてアカシアの試作も実施している。

明治十三（1880）年八月、児島郡下村（現倉敷市）の豪農渾大坊益三郎は、勝北郡の広戸村および馬桑村に牧場を設置し、牛馬の改良繁殖に努めた。清風は内務省に申請して陸奥国の南部産種牛馬を借り受け、これを援助する。

明治十四（1881）年、授産資金として一万円を政府から借り入れる。また同様に、明治十五（1882）年、授産資金として一万五千円を政府から借り入れる。明治十六（1883）年、一外務官僚であった原敬が日本原の開墾地と馬桑村の牧場を視察する。その途中、清風と因州士族の窮状および備荒貯蓄の実際について談話する。明治十七（1884）年、開拓資金の調達のため上京、その帰途病に倒れ、療養先の京都で同年九月没する。

明治四十二（1909）年、当時の岡山県知事であった谷口留五郎が清風生前の功勞に対して賞状と金牌を贈りその功績を称える。

#### 四、士族授産を越えた構想と実践

さて、清風の開拓地での構想と実践はどのようなものだったのだろうか。これについては、『勝農史』所収の「有親会社設立に関する説論文」と「中学校ヲ設立シ物産ヲ興隆スルニ就キ同志申合セ假約定書」が良い資料になる。前者からは清風が有功学舎を設立する際の構想が、後者からは清風が有功学舎を中学校へと発展させる際の構想が窺われるからである<sup>16)</sup>。

##### （1）有功学舎の創設

まず、明治十二（1879）年一月十三日に作成された『勝農史』所収の「有親会社設立に関す

16) これらの構想の経営上の要となる有親会社は、明治十四（1881）年十二月に有親会社出資者の一部が蓄積金を引き出すことによって事実上解散したため、明治十五（1882）年には有功学舎は私塾に格下げとなる（『有親会社設立に関する説論文』に「変則ノ学舎ヲ設立シ」とあるように、有功学舎は変則中学という扱いによって創設された）。しかし、有功学舎がその後も林園書院、作東義塾と名称を変えながら明治三十四（1901）年まで存続したのは、清風の教育に対する情熱に負うところが大きいように思われる。

る説論文」を見てみよう。

夫レ人元氣精神ナケレバ則死ス国ニ元氣精神ナケレバ則亡ブ①我日本帝国ノ精神元氣前ニハ士族之ヲ維持シ今ハ地租金拾圓以上納ル人之ヲ維持スルノ責ニ任ゼザルヘカラス。維新前ニ在テハ士族タルモノ文武ヲ講習シ礼儀廉耻ヲ磨勵シ以テ一國ノ精神元氣ヲ維持ス。②廢藩後士族ノ常職ヲ解カレシヨリ天下ノ士族農ニ商ニ從事シテ失敗ヲトルモノ十ノ七八其金禄公債証書ヲ持守シテ僅ニ生活ヲ為ス者アルモ地租金五圓以上ヲ納メテ選挙ノ權ヲ有スルモノ既ニ少シ。況ヤ被選挙ノ權ヲ有スルモノニ至テハ百中ノ一ニ過ギズ。夫レ礼儀廉耻ハ一國ノ元氣ナリ知識ヲ練磨スル一國ノ精神ナリ。今ヤ士族衰頹既ニ如此ナレハ一國ノ元氣ヲ維持シ一國ノ精神ヲ發達スルモノハ地租金拾圓以上ヲ納ムルノ人ニ於テ自ラ任セサルヘカラサルナリ。

③客歲政府ニ於テ府県開設ノ公布有リ人民ニ参政權ノ一部分ヲ附与セラル漸ヲ以テ国会開カルヘキハ我疑ヲ容レサル所ナリ。今ヤ県會議員ヲ選挙スルニ当リ投票ノ多数ヲ得テ議員タル人ハ則唯勝北一郡一萬五千人ノ代議士タルノミナラス則一県下百萬人民ニ代テ得失ヲ議スルノ人ニテ開会第一番ノ当選人ナルハ其人ノ榮譽ハ後代迄傳播シ其議事ノ得失ハ現今人民ノ實際ニ關係ス。充宜ク其選ヲ慎重ニシ適任ノ人ヲ得ベシ。当郡トイヘトモ五拾三村二萬五千人ノ多キ其中ニ於テ我必ス其人有ルヲ信スルナリ。④雖然退テ今日ノ景況ヲ觀察スルニ当郡ハ一方ニ僻在シ唯農畝ニ勉強スルヲ以テ一生ノ事業ト為シ新聞紙ヲ閲覽スルモノ既ニ少シ況ヤ今日内外国ノ政体文物如何ヲ熟知スルモノニ至テハ果シテ其人有リヤ否小学設置多キモ未タ幼童伊吾ノ間ニ過ギス。……方今下等小学校ヲ卒業スレハ津山岡山ニ出ルニ非レハ學問スヘキ場所ナキヲ以テ多クハ因循ニ流レ其知識ヲ練磨スレハ天下有名ノ人トナルヘキ妙齡俊秀ノ子弟ヲシテ遂ニ不學文盲ノ人ト做シテ爾豈痛惜慨嘆スヘキノ至ナラスヤ。依テ余切ニ戸長諸子ニ望ム所以ノモノハ⑤地価千圓以上所有ノ人口本年ヨリ明治十六年迄五ヶ年ノ間所有地価千圓ニ付キ五圓ツツ出金シテ蓄積ト為シ当郡内ニテ蓄積会社ヲ開設シ地価三千圓以上所有ノ人ニ就テ頭取ヲ選シ地価千圓以上ノ所有ノ人ニ就テ取締支配人ヲ選シ其選挙ハ投票ヲ以テシ其蓄積ノ金額ハ制限ノ利朱ヲ以テ抵当ヲ取り貸付ケノ方法ヲ立テ五ヶ年後八年々利朱ヲ出金人ニ戻シ入ルベシ。⑥右蓄積金利朱ヲ以テ變則ノ學舎ヲ設立シ投票ヲ以テ校長事務掛リヲ置キ教員ヲ雇イ地価千圓以上所有スル家子弟ニテ下等小学校ヲ卒業スレバ必ズ此學舎ニ入り修學セシムル二年若クハ三年其生徒ノ内ニ就キ格別ニ俊秀ナルモノハ學舎費ヲ以テ岡山及ビ東西京ニ遊學セシメ俊秀ノ子弟ヲ數年鼓舞振作シテ其奮發力ヲ養成スレハ子弟奮起シテ漸次ニ人材彬々輩出シ此僻在不文ノ小郡變シテ

人文ノ淵藪トナリ一県ノ県會議員ハ当郡ヨリ出テ一県ノ榮譽ハ皆当郡ニ集リ…… 國會議員モ当郡ヨリ出テ内ニ在テハ政府ノ大臣參議ト為リ外ニ出テハ全權特命ノ大使ト為ルベキ人ヲ多数ニ出スノ唯今日戸長諸子ノ奮發シテ此蓄積法ヲ立テ此学舎ヲ興スルニ在ルノミ。…  
 … ⑦嗚呼蒸汽機械ナリ汽船ナリ汽車ナリ電線ナリ物産興隆ナリ知識發達ナリ何ニ依テ生ズルカ諸子試ミニ熟慮セヨ皆学問力ヨリ生シ來ルナリ。世間豈不学文盲ニシテ成就シ得ル事アラシヤ我ト志ヲ同シクスル諸子ハ是ヨリ奮發シテ一村内地価千圓以上所有人ニ懇篤説論シテ本月内ヲ期シ報知スベシ。又我ト志ヲ同シクセサル諸子ハ其意見ヲ開陳シテ我愚ヲ開論スル所有ルベシ。是余力今日集金ニ際シ切ニ我戸長諸子ニ所望スル所以也<sup>17)</sup>。

清風はまず、日本の精神と元気は、以前は士族がそれを維持していたが、今後は地租十円以上納める人がそれを維持する責任があるという（下線①）。その理由とは、失業した士族が農業や商業に従事するも殆んど失敗し、地租五円以上納めて選挙権を有する者が少ないばかりか、被選挙権を有する者に至ってはごくわずかであったからである（下線②）。一方、前年には府県会開設がなされ、清風自身、今後国会が開設されることに疑いが無いという（下線③）。

しかし、いざ県議員を郡内で選出するに当って、清風は、今日の郡内の有り様を観察すると、職業としての農業に勤しむだけで、新聞紙を読む者は少なく、まして今日の国内外の政体や文物を熟知する者など誰一人いないという（下線④）。そこで、清風は、小学校卒業後も郡内に留まる者が不学文盲になる現状を述べ、戸長にある要望を示している。

その要望とは、地価千円以上の者が今後五年間出金して蓄積会社を開設し、地価三千円以上の者から頭取、地価千円以上の者から取締役支配人を選挙し、蓄積金に利子を付けて貸し付けることであった（下線⑤）。さらに、上記の利子収入によって学舎を設立し、選挙による校長事務掛を置いて教員を雇用し、地価千円以上の者の子弟を二、三年修学させ、優秀な子弟は学舎費によって岡山もしくは京都、東京に遊学させる計画であった（下線⑥）。

こうして郡内から県議員、さらに国會議員が輩出され、国内では大臣や参議、国外では全權特命大使となる人物が育成されることになるだろうという。最後に清風は、様々な機械や物産興隆、知識發達の全ては学問力によって生じることを力説している（下線⑦）。

以上のように、清風は士族の没落を現実のものとして受け止め、士族に代わって今後一國の精神元気を維持する政治主体は被選挙権所有者であると考えている。そこには、前年に府県会が開設されたこともあり、いずれ国会が開設されるであろうとする清風の期待感も見られた。

17) 木村泰二編『勝農史』創立八十周年記念（岡山県立勝間田農林高等学校、1981年）18～20頁。

しかし、いざ県議員を郡内で選出するに当たり、清風は、新聞を読まず今日の国内外の政体文物を知らない郡民の現状に危機感を覚えている。そこで、清風は、郡内の富裕層の出資によって金融結社を作り、その利子収入によって学舎や遊学の原資を調達したいという。これは国会議員を経て国内外で活躍する政治家の育成を念頭に置いた計画であった。

## (2) 有功学舎の発展

次に、明治十二（1879）年九月二十五日に作成された『勝農史』所収の「中学校ヲ設立シ物産ヲ興隆スルニ就キ同志申合セ假約定書」を見てみよう。

夫レ教育ノ已ム可カラサル物産ノ興隆セサル可カラサル戸長諸子ト共ニ協議討論スルモノ茲ニ一年ナリ今春諸子ノ奮発盡力ニ依リ有親會社ヲ設置シ醸集金ノ利ヲ以テ有功学舎ヲ經營スルヲ得タリ……①唯恨ム所ハ講堂塾舎モ一時ノ借宅ニ出テ狭隘ニシテ既ニ生徒ヲ容ルルニ足ラス去リトテ大ニ經營セント欲スレハ費用不費ナリ頃日諸子ト地價百圓ニ付廿貳錢ヲ醸集シ中学校ヲ新築シ桑園ヲ開拓シテ学校資本ノ爲ニ事ヲ謀ルヤ賛成同意ヲ表スル村方遇数ニシテ延期ヲ請ヒ苦情ヲ訴ル村モマタ少カラス余日夜憂慮思考スルニ教育興産ノ今日ノ急務タルハ諸子ト平生協議スル所ナリ左レトモ是豈凶歉飢歳ニ當テ興立スヘキノ事ナランヤ亦豈其外ヲ粉飾シテ其内ヲ空ウニシ効無キノ所爲ニ傲フナランヤ②今日設立スル所ノ学校ハ今日有用ノ事理ヲ講究スルノ学校ナリ今日開墾スル所ノ桑園ハ此有用ナル学校ヲ維持スル爲メノ資本ナリ豈蒙時陋劣ノ説ニ疑惑シテ止ムヘキ事ナカランヤ亦豈謂事無キ苦情ノ爲ニ抹殺セラルヘキ事ナランヤ③本年ノ如キハ田畠作物皆豊穰ニシテ米價ハ却テ平年ヨリ遇陪ノ貴キニ居ル農家ニ在テハ真ニ鼓腹擊壤ノ氣象ヲ現出スルノ今日ニ於テ何ノ疑フ所カ之レ有ンヤ本年ノ收穫大凡壹段歩ニ付平年ニ比スレハ少キモ三四計多キハ七八計ニ残ルヘシ地價百圓ニ付廿貳錢ノ醸金ハ僅ニ壹段歩ニ付貳斗内外ニ當ル何ゾ民力ニ堪ヘサル事カ之有ンヤ何ソ之カ爲メニ民間ノ疲弊ヲ来タス可キノ理有ンヤ是レ余ト諸子ト共ニ淨ク確信スル所ナリ然レトモ又退ラ思考スルニ是余ト諸子トノ志ト謂フ云爾④維新前ニ在テハ士族ハ文武ヲ講究シテ政務ノ責メニ任シ農民ハ耕耘ニ従事シ貢租ヲ完納スルヲ以テ負擔ト爲ス亦文武政教ノ何事タルヲ知ラス是從來農家ノ風習ニシテ今日形勢一變復昔日ノ天下ニ非ルヲ知ラサルナリ今日ノ平民ハ昔日ノ士族ヨリ負擔ノ重キヲ知ラサルナリ……⑤余諸子ト同シク民間未タ蒙昧ノ風習ヲ脱セサルヲ了知スルナリ而シテ之ヲ如何共爲ス可カラス之ヲ訓告スヘカラスト謂テ之ヲ度外ニ措キ其爲ス所ニ其言フ所ニ任カセテ之ヲ放擲スルニ豈郡村吏ノ職務尽キヌト言フヘケンヤ豈自己ノ誠心ヲ尽スト言フヘケンヤ然ラハ則教育ナリ物

産ナリ苟モ一日ノ先見有ルモノ一村一郡ノ責メニモ任スルモノ之ヲ忽諸ニ付スヘケンヤ⑥  
依テ各自ノ所有地價百圓ニ付拾五錢ヲ釀集シ桑園ヲ開拓シテ学校維持ノ資本トナシ假リニ  
塾舎ヲ新築セント欲ス切ニ望ム戸長諸子同志諸兄余ト志ヲ同クシテ左ノ條款ヲ目的トナシ  
各村議長議員ト協議ヲ遂ケ此大事業ヲ成就シ他年人才輩出物産興隆ノ結果ヲ奏シ此僻在ナ  
ル勝北郡ヲシテ縣下第一等ノ地位ヲ占メシメン事ヲ至願至祈ニ堪ヘス<sup>18)</sup>

清風は先述した有親会社を予定通り設置し、その蓄積金の利子収入によって有功学舎を経営することができた。やがて講堂塾舎が狭くなって生徒を収容できない問題に直面し、清風は、地価百円に付き二十二銭を集金して中学校を新築し、桑園を開拓して学校資本とする計画を立てた。しかし、その計画に賛成同意する村方は殆んどいなかったという（下線①）。

清風は計画の内実が伴っていないという批判に対し、設立する学校は今日有用の事理を講究する学校であり、開墾する桑園はこの学校を維持するための資本であるといい（下線②）、計画を実施する年が凶作飢饉の年と重複しないことを確認するため、今年の郡内の収穫高と米価、さらに郡内の生産力の動向を示し、民間が疲弊する道理はないという（下線③）。

清風は結局、自らと戸長の志の問題として、今の平民は政務を担ったかつての士族より自らの負担が重いことに無自覚であると指摘し（下線④）、そうした民間に残る蒙昧な風習を戸長が知っておきながら、民間のなすがままに投げやりにすることにに対し、郡村吏の職務や自己の誠心を尽くしているとはいえないと戒めている（下線⑤）。

これにより、集金は当初の計画から七銭減額されるものの、地価百円に付き十五銭を集金して桑園を開拓して学校資本とし、仮の塾舎を新築する計画が実施されることとなった（下線⑥）。

以上のように、清風は有功学舎の校舎不足という問題に対し、住民から集金して中学校を新築し、桑園を開拓して学校資本に充てる計画を立てる。それは郡内の収穫高や米価、生産力を踏まえた計画であり、今日有用の事理を講究する学校が設立される予定であった。しかし、村方の反対に直面すると、清風は村方を責めることをせず、自らの社会的責任に無自覚な平民をなすがままに放置する戸長を戒め、郡村吏の職務や自己の誠心を尽すよう勧めている。この清風の働きによって集金額がやや減らされた上で計画通り実施されることになった。

## おわりに

本稿では、筆者がこれまで取り組んできた〈実務家〉としての儒者研究の終着点に立つ人物、

18) 木村泰二編『勝農史』創立八十周年記念（岡山県立勝間田農林高等学校、1981年）24～26頁。

すなわち元々実務に携わる武士身分でありながら豊かな儒教教養を持つ人物として因幡国鳥取藩士安達清風を考察した。

まず、幕末期の清風の略歴を概観した後、遊学先の交友に宛てた文章を通して清風の学術交流の実態を明らかにし、次に、開拓地での清風の活動履歴を概観した後、開拓地で推進した学校運営を通して清風の開拓地での構想と実践を提示した。

清風の幕末期の略歴と開拓地での活動履歴を概観すると、幕末から明治にかけて活躍した安達清風という人物はその実践性が優れており、かつ、それが多方面に及んでいたことがわかる。ここで、幕末期の清風の学術交流の実態が維新期の清風の教育および産業振興の内容とどのように関わるのかにつき、三点に分けて整理しておきたい。

まず第一に、清風が庶民の知識による台頭に対して肯定的である点である。

清風がその交流によって刺激を得た森子順は「草沢」の「英雄」を待望する一方、大久保七郎左衛門の一言によって清風が模範とした「陳同甫」（陳亮）は、「布衣」でありながら「直言」によって「讜論」する人物であった。

実際、維新时期になると、清風は士族の没落を現実のものとして受け止め、今後士族に代って被選挙権所有者が一国の精神元気を支えるべきだと考え、今の平民の社会的責任に言及した際には、それが以前の士族よりも重いものと認識している<sup>19)</sup>。

第二に、清風が政治参加するに当たって時事知識を重視している点である。

大久保七郎左衛門の一言によって清風が模範とした「陳同甫」（陳亮）の「上書」とは、「迂闊」な読書人による「大学之講」と全く異なる一方、清風にとって「当代之陳同甫」であった七郎左衛門の「上書」も「有司」の「迂闊」に阻まれていた。

実際、維新时期になると、清風は県会議員を郡内で選出するに当り、新聞を読まず今日の国内外の政体文物を知らない郡民の現状に危機感を覚えている。

第三に、清風が学校の教育内容に対して実用性を重視している点である

清風がその交流によって刺激を得た森子順は、経学を治めるだけでは「郷里之善人」にはなりえても「天下有用之人」にはなりえないと認識し、のちに清風とともに「経史」を高め合う仲となっていた。

実際、維新时期になると、清風は、創設した有功学舎で「四書」「小学」の句読や『皇朝史略』の講義をさせ、さらに有功学舎の校舎不足という問題に対し、住民から集金して今日有用の事

19) こうした庶民重視の姿勢は、寛文七（1667）年に御坊主に召しだされ、父辰三郎の代に老練な財務官僚として台頭した安達家のルーツとも関係するようと思われる（「安達辰三郎」『鳥取大百科事典』、新日本海新聞社、1984年、21頁）。

理を講究する学校を設立、桑園の開拓によって学校資本を調達する計画を立てている。

以上を総括すると、幕末期の清風の学術交流と維新期の清風の教育および産業振興は、その通念レベルにおいて少なからず関わりがある。清風の活動は幕末から明治にかけてははっきりと連続していたのである。

では、清風の開拓事業と儒教教養との関わりはあったのであろうか。ここで注目したいのは、播磨国小野藩儒者山田孝堂である<sup>20)</sup>。孝堂は懐徳堂出身者であり、維新期の飾磨県の教育行政に関与した人物である。また、孝堂は自らの塾の文会に東咳を必ず招き、さらに孝堂が東咳主催の「老莊荀韓會讀」に参加するなど、泊園塾の学術を深く受容していた。

孝堂は養蚕業を営む友人に宛てた助言の中で、官吏に対しては「濟生之良心」による「養蠶」の普及を奨励するとともに、政府に対しては「間地」開拓と「貧民」移住の実施を求め、養蚕業者として「貧民」を「育成」「使用」する「富國」策を提案している。

清風が勝北郡長として実践したのは、まさに孝堂が提案した政府による「間地」開拓と「貧民」移住ではなかったか。つまり、それは「濟生之良心」による事業、すなわち経世済民の学の実践としてなされたものと考えられる。清風が「辺警」以来の目標であった「天下有用之人」とは、国家を視野に入れて経世済民の学を実践する人物を指しているだろう。幕末期において泊園塾の学術を受容した儒者たちは、明治政府の政策目標となる「富国強兵」に適うように自らの理論を構築し、それを実践していたのである。

---

20) 拙稿「山田孝堂の学術と実践—幕末の懐徳堂・泊園塾と維新の〈実務家〉—」(『文化交渉』第3号、関西大学大学院東アジア文化研究科、2014年)参照。